

シューベルトの歌曲集「美しき水車小屋の娘」(2) — 歌手とピアニストの為の演奏と解釈 —

野々垣 文 成

4. 小川にのべる感謝

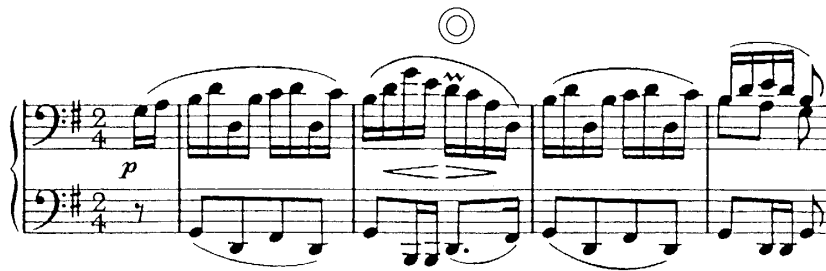
第4曲目は「美しき水車小屋の娘」のところへ連れてきてくれた小川へのやさしい感謝と若者の満足感を十分に歌い表している。歌の最初の歌詞は第3曲目の「止まれ」の最後のフレーズで4回繰り返して歌い終えている歌詞である。“war es also gemeint?”〔この家のことを言っていたのだね?〕—ここでの‘es’は“das Haus”〔この家〕の代名詞である。—同じ歌詞で終わり、そして同じ歌詞が始まると言う事は曲や音楽が別であっても心情的にはかなりの繋がりがあ一連の感情が必要となるであろう。ピアノパートは第3曲目の水車が激しく廻っている情景より離れ穏やかな小川の流れになっている。ピアノパートの表現は明るく暖かく強い響きを持って包み込むように流れなければならない。あいにくこのピアノパートは左右共にへ音記号で書かれている。歌のメロディー線とは全く混ざることなく全く分離した位置に置かれている。左手の通奏低音的な動きに右手の小川そのものの動きが乗っている。しかしこの左手をただの通奏低音として処理してはならない。あくまで右手のメロディーを支え又歌声部をも支えなければならない。このような音型を前述の様な表現で演奏することはピアニストとしてかなりな力量を要求される。日本人の感覚で演奏をするとほとんどが暗く感傷的になり過ぎてしまうので気をつれなければならない。演歌のような感情移入は危険である。タッチには最善の工夫と努力が必要である。特に右手のタッチだが指先からさらに針を伸ばした感覚を意識し指を上げず鍵盤の最も深いところでデリケートに打鍵するとよいであろう。この曲の様にこの曲集には類似曲がまだ他にも沢山ある。もし無神経なタッチで演奏すれば小川は汚れた水で澱み全くこの曲本来のイメージを壊してしまうだろう。若者の感謝と喜びが溢れていなければならない。第2、19、39

小節の装飾音〔モルデント〕は水面〔みなも〕の波が太陽に反射している様子であろう。決して重く演奏してはならない。〔譜例1・◎印〕この曲の表示は *Etwas Langsam*〔少しゆっくりと〕である。♩=46位であろう。決してゆっくりになりすぎてはいけない。又8分の4拍子に感じてはいけない。このような曲は結構演奏家の感性だけで演奏をすると大きな解釈間違いを引き起こすのである。そして音楽は決して感傷的になってはいけない。歌手は小川のほとりに建っている水車小屋を見て、希望と喜びを十分に持って、明るく暖かい響きの強い細い声でしかも安定したレガートで流れるように歌いだす。ピアノパートの右手のメロディーと歌声部の美しいデュエットである。実際に歌いだしてみよう。この曲で大きな問題はブレスであろう。ブレスが解決すれば曲全体を流れるようなレガートで支配することが出来る。フレーズや詩の内容を適格に表現するためである。最初のフレーズでは〔譜例2〕第5小節のVが正しいであろう。第6小節目の〔V〕でも間違いとは言いが第3曲目の最後の歌詞を受けてその関連性を考えると前者の方が正しいであろう。又第6小節の一拍目の最後の16分音符はフレーズの中で最高音であるが *rauschender*〔ざわめく〕と言う形容詞の語尾にあたる音符である。歌手は決して強く張り上げて歌ってはいけない。〔譜例2・×印〕このような事はドイツ歌曲にとっては常に出てくる問題であると言う意識は持ち続けなければならない。第8、9小節目に出てくる“war es also gemeint?”においては一回目は美しくきれいな響きで、気持ちテヌートを掛けるくらいで大げさに表現することは避けなければならない。第8小節の2つの *fis*〔#ファ音〕は *gemeint* の *ge* を歌い直し歌詞と音楽に抑揚を付けたい。だから決してクレッシェンドはしてはならない。オペラティックに歌って全体の曲のバランスを崩して

はならない。2回目は innig〔内的に〕に自分に向かって演奏するとよいであろう。〔譜例2・線部分〕〔譜例2・×印〕と同様な問題が第11、12小節にも発生している。〔譜例3・○印〕この部分の最高音は単語の途中に出てきているのでこの2つの高音はその前の音符より強く歌うことを避けなければならない。いままで述べてきたフレーズごとの最高音は小川の流に逆らわないようにあくまで自然にメロディーの中の経過音として演奏したい。曲の内容としては「水車小屋の娘」を若者はここではっきりと意識しだす大切な個所である。第13小節目の gelt〔よし!〕は曲全体の音型の動きの中で吐出した音符である。〔譜例3・◎印〕自他共に認める様に感動的にしかも若者自身納得の表現が必要であろう。この個所から zur Mülerrin hin〔水車小屋の娘のもとへ行こう〕ま

で気持ちを持っていかなければならない。歌詞の内容と共に若者の気持ちの昂揚とが必然的に mf となっている。第22小節から24小節までの3小節は短調である。この短調は“hast mich berückt”〔小川が私(若者)をだましたのか〕に掛かっている。若者のはやる気持ちとは裏腹に揺れる気持ちを微妙に表現されている。〔譜例4〕第28小節からはやわらかく、デリケートに、リリッシュに歌うのだが気持ちの上ではこの曲の歌い始めと同じである。〔譜例5〕第33小節からは若者の満ちたりた気持ちを消化できるように演奏したい。十分豊かな気持ちで今の満足を歌い上げたい。2回繰り返されている“vollauf genug”〔満足している〕の1回目はたっぷりめに表現し、2回目はインテンポで内的表現がいいであろう。もちろん強弱はこの曲としては強めの mf である。

〔譜例1〕



〔譜例2〕

V × [V]

War es al - so gemeint, mein rauschender Freund, dein Sin - gen, dein Kling - en,

war es al - so ge - meint, war es al - so ge - meint ?

[譜例 3]



Mül-le-rin hin, so lau-tet der Sinn, gelt, hab ich's verstanden, hab ich's verstanden?
zur Mül-le-rin hin, zur Mül-le-rin hin.

[譜例 4]



Hat sie dich geschickt, o-der hast mich berückt, das möcht ich noch wissen,

[譜例 5]



Nach Ar-beit ich frug, nun hab ich ge-nug für die Hän-de, für's Her-ze, voll-auf ge-nug, voll-auf ge-nug.

5. 仕事じまいの夕べに

何という激しい動悸であろう。この音型は「水車小屋の娘」に対する若者の心臓の鼓動である。音型は2回繰り返されているが1回目、2回目と若者の気持ちは昂揚している。〔譜例1〕第1、3小節は前のめりに音楽を運び、第2、4小節は少し落ち着く。そして第2小節の休符を切迫した感じを持ち2回目へと音楽を進める。ディクレッシェンドをそれぞれ2つの音符に掛けるともっと感じが出やすい。〔譜例1・>〕第4小節目の4拍目からの16分音符は曲の最初から始まっていると感じて演奏した方がよいであろう。〔譜例2〕この第5曲のピアノパートは前奏からわかるように2種類の音型が全体を支配していることがわかるであろう。16分音符の音型は主には水車の廻る音を表現しているのだが、部分的には若者の気持の燃れをも表現している。若者は全く取り乱し理性を失っている状態でこの第5曲を歌い始めている。歌声部は激情的で荒々しく朗読調である。速度表示は♩ = 72位であろう。表示は *ziemlich geschwind* [かなり速く] であるが歌手の声の種類、重みによって多少の変化は当然である。又前述したように朗読調であるためテンポは歌詞の内容によっても微妙に揺れるのである。第1節は水車屋にいる若者の希望と現状を訴え歌っている。しかし第1節の終わりは“Daß die schöne Müllerin merkte meinen treuen Sinn” [あの美しい水車屋の娘が僕の真心に気付いてくれるように] と歌っているのだがここでは激しく朗読調に歌わず全く気分を変えて柔和なレガートで美しく歌う。しかし歌詞の内容は異なるが第3曲「生まれ」の中の“ei, willkommen”を歌った時のように *mezza voce* [半分の声で] で優しくあこがれを持って歌わなければならない。もうかしこい演奏家達は気が付いたであろうがこのフレーズは長調になっている。日本人が音楽内容表現の感じる感性としては長調から短調になったときと思いがちであるが、この逆も往々にしてある。むしろ短調から長調への転調の方がより効果的であろう。この場合長調転調部分は薄く明るくゆったりと表現しなければならない。そしてテンポもあくまで同一であるが表現上多少ゆっくりになっても構わない。〔譜例3〕第24、25小節は場面展開の経過部

である。〔譜例4〕ピアノパートは今までの水車の廻る音型から急に若者の心臓の鼓動に移っていく。ここでピアニストは大きな困難に出会うことになる。曲の最初から廻りだした水車を心臓の鼓動に置き換えていくことはテクニックの問題だけではない。ピアニスト自身の音楽の構築性を試されているようである。テンポは聴衆にわからないくらいのブレーキを掛ける。音型が心臓の鼓動を刻みだしても基本的には水車の廻る音型を重ねておくとも音楽の移行が自然の中で行われるであろう。これはあくまで理論的な考えのみではなくピアニストの大いなる感性にも頼わざるをえない。第2節をみてみよう。“Ach, wie ist mein Arm so schwach!” [ああ、僕の腕はなんて弱いのであろう] と歌いだしている。〔譜例5〕若者の冒頭の激情は消え失せ感情は萎えてきている。しかし表面的には力と怒りを持ってできるだけテンポ通りに演奏しなければならない。実際には遅くなる。このメロディーを歌手は歌うのではなく若者の気持ちとして喋り、訴える方が効果が高い。レガートに歌う必要性は全く感じない。又ピアノパートの音型を前奏部の様にディクレッシェンドを掛けると〔譜例5・>〕若者の表面的な力と怒りとは裏腹に息も出来ない程の疲れが見え隠れして音楽は更に増幅される。第36小節からの唐突とも思える音楽の変化で若者は現実の状態に引きもどされている。〔譜例6〕ピアニストはこの唐突な変化にどこまで対応できるかがこの曲の課題の1つであろう。右手のアルトの旋律を落ち着き明確にゆったりと表出することによって歌手の気持ちを柔らげることが出来るであろう。ピアニストの対応次第で歌手の表現の幅を狭めてしまう。ピアノパートは前部分とは打って変わり柔らかな落ち着いた雰囲気をかもしだしている。歌手もピアニストも十分なレガートで演奏したい。そして歌手の入りまでのたった2小節の間に次に来るような歌詞の内容の雰囲気にいかに変化させるかである。第5曲の標題がこの部分の歌詞から引用されている。“Und da sitz ich in der großen Runde” [仕事じまいの静かな涼しい夕べに、僕は大きな車座に加わって座っている。] 第46小節目から59小節目までは水車屋の親方と娘の直接話法をとって音楽は進められている。〔譜例7〕前半の

親方の個所では響きのある胸声を混ぜ威厳を保ち、満足そうにつぶやいている。ピアノパートは親方の性格を強調するように全体的にバスの響きを強く出し気持ち遅れる様に演奏するとより親方の性格を出す助けになるであろう。そして水車屋の娘の“allen eine gute Nacht”〔みなさん、おやすみなさい〕の個所では若者のあこがれを聴衆に表現しなければならない。明るく柔らかく優しい音色が要求される。歌手もピアニストも親方と娘の対照を際立たせなければならない。歌声部の高低差は両者の性格上明らかであるが歌手にとっての表現上、テクニック上の大きな聞かせどころとなる。一回目の〔みなさん、おやすみなさい〕は現実の水車屋職人達に挨拶しているところであり、二回目は若者の個人的な望みであり夢でもあるところである。一回目は in tempo で、二回目は軽く rit を掛ける必要があるであろう。ピアノパートも親方の個所と類似しているが美しくやさしい水車屋の娘の性格を強調するために全体的にバスの響きを強調せずソプラノを出し薄く控えめに〔遅れがち〕演奏するとよいであろう。そして娘の個所の方が親方の個所よりも動きがあることを見過ごしてはならない。又演奏者は第 56 小節目の sf〔スフォルツァンド〕の意味に気付かなければならない。〔譜例 7・○印〕水車小屋の娘は若者に一瞥もせず全ての職人達に就寝前の挨拶をしている。娘に個人的な思いを寄せている若者にとっての胸をえぐられるようなショックを表現している音である。心臓の強い動悸の音である。この和音の影響によって娘は一回日に増し職人達にやさしく愛想よく挨拶をしている様子を表現することとなる。第 59 小節目の“Nacht”の声は再び激しい水車の廻る音によって掻き消されてし

まう。〔譜例 8〕ピアニストは歌手の歌い終わりを無視して f で弾き始める事である。ここでの音型は単純に水車の廻る音を表現しているわけではなく、若者の心は乱れ、不安、焦燥、怒りを表わしている。当然冒頭に出てきている音型とを見比べなければならない。冒頭の部分は ♪♪ という音型で、安定した水車の廻る情景を表現しているが再現部では ♪♪♪♪ の音型となり若者の苦悩をはっきりと表現しなければならない。再現部からは冒頭に増して激しい f で歌い続ける。第 69 小節から 73 小節、第 74 小節から 78 小節にかけてはこの曲最大の頂点である。音楽的にも声量的にも盛り上がる必要がある。〔譜例 9〕そして突然第 79 小節で p が表れる。〔譜例 10〕この最後の 2 節はかなわぬ恋に対する思いが歌い込まれている。ここではレチィタチーボ風〔喋るように〕に憧れを持ってささやくように messa voce で歌う。ピアノパートの和音は前述した水車小屋の娘の性格が再度登場させなければならない。subto p〔突然弱く〕がよいであろう。ピアニストは若者と水車小屋の娘の性格をはっきりと弾き分けるテクニックと音楽性を要求される。後奏はこの曲最後の言葉“treuen Sinn!”〔僕の真心を〕と同じ音型で始まっている。〔譜例 10・線部分〕歌声部は指示はないが少し rit をして終わるのでピアノパートはそれを引き継いで歌声部のテンポを受け弾きだす。この 2 小節の間に自然に元のテンポに戻し最後の 2 つの和音で全てを解決しなければならない。随分と取りとめもなく書いてしまったがこの曲の変化に富んだ内容を演奏者はそれぞれの課題として抱え取り組む事が出来れば演奏家冥利に尽きるであろう。この様な取組みこそ聴衆を納得させるのである。変化に富んだ大作である。

シューベルトの歌曲集「美しき水車小屋の娘」(2)

[譜例 1]

Musical score for Example 1, showing piano accompaniment in 6/8 time. The first system features a forte (*f*) dynamic and includes a 7-measure rest in the bass line. The second system features a piano (*p*) dynamic and includes a 4-measure rest in the bass line.

[譜例 2]

Musical score for Example 2, showing piano accompaniment in 6/8 time. The first system features a forte (*f*) dynamic and includes a 7-measure rest in the bass line. The second system features a piano (*p*) dynamic and includes a 4-measure rest in the bass line. An arrow points to a specific note in the upper right of the first system.

[譜例 3]

daß die schö - ne Mül - le - rin merk - te mei - nen
 treu - en Sinn,

[譜例 4]

Musical score for Example 4, showing piano accompaniment in 6/8 time. The score consists of a single system with a 7-measure rest in the bass line.

[譜例 5]

Ach, wie ist mein Arm so schwach, was— ich he - be, was— ich tra - ge, was ich

[譜例 6]

nach. Und da sitz ich in— der gro- ßen Run - de,
und der Mei- ster sagt zu al - len: eu-er Werk hat mir ge - fal - len, eu-er Werk hat mir ge -

[譜例 7]

fal - len; und das lie - be Mäd - chen sagt — al - len ei - ne gu - te

シューベルトの歌曲集「美しき水車小屋の娘」(2)

Nacht, ○ al - len ei - ne gu - te Nacht.

sf> *p*

This musical score shows a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line consists of a few notes with a circled 'o' above the first measure. The piano accompaniment features a series of chords and some melodic lines in both hands, with dynamic markings *sf>* and *p*.

[譜例 8]

Nacht.

f

This musical score shows a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line is mostly rests with the word 'Nacht.' written below. The piano accompaniment features a rhythmic pattern of eighth notes in the right hand and a more active bass line in the left hand, starting with a dynamic marking *f*.

[譜例 9]

daß die hö - ne Mül - le - rin merk - te mei - nen, mei - nen
treu - - - en Sinn,

This musical score shows a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line contains the lyrics 'daß die hö - ne Mül - le - rin merk - te mei - nen, mei - nen treu - - - en Sinn,'. The piano accompaniment is mostly rests, with some notes in the bass line.

[譜例 10.]

daß die schö - ne Mül - le - rin

p

This musical score shows a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line contains the lyrics 'daß die schö - ne Mül - le - rin'. The piano accompaniment features a series of chords in both hands, starting with a dynamic marking *p*.

merk - - te mei - nen treu - en Sinn.

The first system of the musical score consists of a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line is written in a single treble clef staff, starting with a whole rest followed by a melodic phrase: a quarter note G4, a quarter note A4, a quarter note B4, a quarter note C5, a quarter note B4, a quarter note A4, and a quarter note G4. The lyrics "merk - - te mei - nen treu - en Sinn." are aligned under the notes. The piano accompaniment is written in grand staff notation (treble and bass clefs). The right hand plays a series of eighth notes in the treble clef, while the left hand plays a series of eighth notes in the bass clef. The first measure of the piano part is marked with a forte dynamic (*f*). The second measure is marked with a piano dynamic (*p*).

86

The second system of the musical score begins with a measure number of 86. The vocal line is written in a single treble clef staff and contains four whole rests. The piano accompaniment is written in grand staff notation. The right hand plays a series of eighth notes in the treble clef, while the left hand plays a series of eighth notes in the bass clef. The first measure of the piano part is marked with a pianissimo dynamic (*pp*). The second measure is marked with a forte dynamic (*f*).

6. わけを知りたがる者

何という美しく素朴で清らかな一曲であろう。歌曲集はこの第6曲目から若者の気持ちに入ってくる。その意味でもとても重要な役割を果たしている。そして歌手とピアニストはこの曲からシューベルトの偉大さを嫌という程に知らされることになるであろう。この洗練された美しい音楽性、美しい響き、なめらかな安定した旋律線どれをとつても演奏家にとっては後退りをしたくなるような要求である。聴衆はこのような演奏家の心境とは別に曲のあまりの美しさに気を取られ、演奏家の恐怖や苦痛には気づかないであろう。又演奏家はいかなる場合でも聴衆にそのようなことは気づかれてはならないのである。この音楽はただ清らかで素朴である。この曲全体は「問い」の形が支配している。歌詞の内容を十分に理解していなくてもメロディー線の動きによってかなり表現されている。速度表示は♩=56位で、Langsam〔ゆっくりと〕である。第4曲目においても述べたように8分の4拍子になってはならない。ゆっくりとしている拍を正確に演奏しそれを聴衆に正しく伝えることはかなりの鍛錬を積み重ねてきた演奏家にしか出来ない技であろう。まず前奏からみてみよう。前述したように冒頭から「問い」のフレーズが出現している。この前奏は自問自答の形をとっている。若者が小川に問いかけているが答えはない。若者の不安とは裏腹に音楽の美しさも強調したい。〔譜例1〕ここにおける16分休符の演奏はかなりの困難を伴う。第1小節目は8分音符の響きをきれいに消し、印象的に瞬間の〔16分休符〕静寂を与える。2拍目も同様にしかも気持ちの昂揚を感じgis音〔#ソ〕に入る。〔譜例1・矢印〕gis音のつぎの4分休符では流れを止めずピアニストの腕の落ちる力で第3小節目に入る。第3小節目の32分音符は〔譜例1・○印〕決して滑ってはならない。滑らかによく歌う事である。第1、2小節目は自問の形で第3、4小節目は自答である。この前奏の音型〔第1小節目〕をなぞって歌声部が出て来るのである。声は明るく、細く、柔らかく暖かい響きを伴っていなければならない。この曲は歌詞の内容ももちろん重要であるが音楽の柔軟さとメロディーの美しさをまず強調するべきであろう。メロディーはドイツ語のイントネーション

を大切に歌わなければならない。〔譜例2・>〕符点の弱拍つまり16分音符に付いている言葉は全て単語の語尾である。必ず>を明確に付けながら鮮明のドイツ語で歌い出したい。又語尾にあたる16分音符〔譜例2・○印〕もていねいに瞬間立ち止まって歌いたい。この16分音符は実際以上の表現の意味を持っているからである。そして各フレーズの後に続く8分休符は印象的に瞬間の静寂を与えると、各々のフレーズが生き生きとし、若者の不安な真理描写を表現するのに役立つ。この冒頭の美しいメロディーの終わりには若者の動揺する様子が歌い出されている。第17小節からである。〔譜例3〕第9小節からのメロディーの変奏ともとれる動きである。このメロディーは前述のメロディーに比べ暖かくやさしさを持ちレガートに演奏したい。なぜなら歌詞の内容は若者が友である小川に語りかけ尋ねているからである。このような内的表現と声のテクニックによって聴衆は納得させられてしまうからである。“ob mich mein Herz belog”の個所の音楽と歌詞のずれについて述べておく。音楽の頂点はfis音〔#ファ〕であると見受けられる。〔譜例3・○印〕しかし歌詞の頂点は“Herz”である。〔譜例3・●印〕であるから歌手はfis音に向かってクレッシェンドを掛けて歌うことは決してしてはならない。“Herz”を強調しなければならないのは自然の音楽の流れにおいては当然である。ここでも冒頭に述べたように細かい>を付け言葉と音楽を適格に表現したい。〔譜例3・>〕ピアニストのペダルの事についても少し述べておく。歌声部においては全体的にペダルは使わない方がよい。第10小節目の1拍の裏拍で踏み2拍目の頭で放す。第17小節からは1拍づつ第18小節目の1拍まで踏む。後者のペダルの個所はとても重要である。効果的に演奏したい。第20、21小節目の間奏は歌手の全てを受け内容豊かに歌手と同じように明るく柔らかく滑らかに表現するのは至難の技である。又歌手にとっての試練の場となる第22小節である。この休符を恐れない歌手はほとんどいないであろう。この休符の間歌手は冒頭の音楽を受け心地よい空間を感じなければならない。決して拍のみを感じてはいけぬ。次の節に移ろう。速度表示はSehr Langsam〔大変ゆっくり〕で♩=

50 位であろう。ここからは拍子も 4 分の 3 拍子に変化し音楽に自然な変化を与えている。基本的には冒頭のメロディーの延長線上にある。速度もさらにゆっくりとなり、歌手にとっての負担は倍増している。もちろんピアニストにとっても同様である。歌手はどのような場合にも常に声を大変な思いをしてコントロールをしている。第 23 小節以降は通常よりももっとコントロールをする必要がある。〔譜例 4〕この部分では均等化されたピアノッシモで長いフレーズを安定した明るいブリランテ〔輝かしい〕な声でゆるぎなく歌い通す事が必要であり、不可欠である。第 25 小節目の一時的な転調は歌詞の内容を音楽的に増幅している。〔譜例 4・点線部分〕内容としては「なぜに今日はそんなに黙っているの？」若者の期待とは違った内容である。第 3 拍目の 3 連音符の動きが内容に拍車を掛けている。このデリケートなメロディーの合間に第 26、30 小節のピアノパートが更に色を付けている。〔譜例 4・線部分〕このピアノパートは歌声部よりもレガートに明るくきらめくように演奏したい。穏やかな小川の流れのアクセントである。又第 28 小節、3 拍目の〔譜例 4・○印〕について考えてみたい。この小節のピアノパートにはレガートが記されている。このレガートの曲に更にレガートを書き込んだ小節のアクセントは奇異な感じを受ける。しかるにこのアクセントはアクセントとして演奏するのは間違いである。ここで歌われている“ein Wörtchen”〔一つの言葉〕はこの曲中最も大切な言葉である。ことさら“ein”〔一つ〕が重要である。しかも曲の流れを妨げてはならない。明るく、薄く歌い、又大切にこの言葉をテヌートぎみに強調するのみで十分である。この曲は大きく 3 つの部分に分かれていることはもうおわかりであると思う。第 32 小節の 3 拍目からの小川の流れ、様子が、又メロディー線が全く変わっている。〔譜例 5〕第 32 小節の第 3 拍目の変化がこの曲の確信にふれている。第 2 拍目までの音型から大胆にもたった 1 拍で音楽の流れを全く変えているのである。〔譜例 5・点線部分〕第 33 小節目の第 2 拍目の fis 音は“Ja”〔はい〕と明るく誇らしげに自信を持って強めに、第 35 小節の“Nein”〔いいえ〕は内向的に沈んだ感じで前者と後者が全く別性格

で表現したい。ピアノパートでは第 32 小節の第 3 拍目は急なクレッシェンドをかけ、第 33 小節目の和音は強く弾く。第 34 小節の 2 拍目は弱く第 35 小節の 2、3 拍目にはクレッシェンドとディクレッシェンドをかけると音楽のうねりがでてくる。〔譜例 5・＜＞〕さらに第 35 小節いっばい長めのクレッシェンドをかけ、第 37 小節で subito p〔突然弱く〕をかける。このレツィタティーフ風の個所を通して和声的に充実した響きを保ちながらピアノパート部分を支えなければならない。デリケートに感情豊かに心を込めて歌い上げるように弾くべきである。ピアニストは自分自身が歌手になったような錯覚を起こしているように。歌声部では第 36 小節の部分は緊張して音楽も声も前に進め、突然の p がきても気持ちが萎えないように演奏しなければならない。〔譜例 5・矢印〕そして第 39 小節はこの曲の頂点であることは明白である。このメロディーは第 36 小節の拡大である。当然情熱的に f で歌わなければならないがあくまでドイツリードの枠は超えてはならない。歌手はこのことをよく理解して十分な表現をする必要性を感じなければならない。またその表現が聴衆を魅了するのである。第 41、42 小節はこのうえなく美しく、浮遊感に富んだ色彩豊かな経過部である。〔譜例 6〕音楽はレツィタティーフ風の部分から一気に元の静かな小川の流れに戻されている。第 41 小節目の急激な和音の変化をピアニストは音楽的な正しいテンポ感で適確に表現したい。ここで言う正しいテンポとは決してメトロノームのテンポを指しているのではないことをピアニストは理解しているであろう。第 41 小節と第 42 小節の間には音楽的な大事な変化点が存在する。〔譜例 6・○印〕この個所の音楽は決して切れてはいないのである。しかし音楽の急激な変化をしっかりとこの部分の間で支えなければならない。この間を無視すると音楽はよりどころを無くし音痴に聞こえてしまう。ピアニストの品格にかかわることになるであろう。第 48 小節の第 3 拍目の his〔#シ〕〔譜例 7・矢印〕は単純に考えると前述部分の音を変化させたものと思いがちであるが実際は歌詞の内容から全く意味の違った音であることがわかる。音の内容は“sag Bächlein”〔言っておくれ小川よ〕であり若者が小川に言葉

シューベルトの歌曲集「美しき水車小屋の娘」(2)

を投げかけているのである。当然嘆願しているの
であるから音楽は前に進ませて演奏しなければなら
ない。第 53 小節からの後奏は小川が若者に心

の安らぎを与える様に柔らかな響きで全てを包み
込むように終わらなければならない。

[譜例 1]

[譜例 2]

Ich fra - ge kei - ne Blu - me, ich fra - ge kei - nen Stern,

[譜例 3]

mein Bäch - lein will - ich fra - gen, ob - mich mein Herz be - log.

[譜例 4]

Bäch - lein mei - ner Lie - be, wie bist du heut so

stumm, will ja nur Ei - nes wis - sen, ein

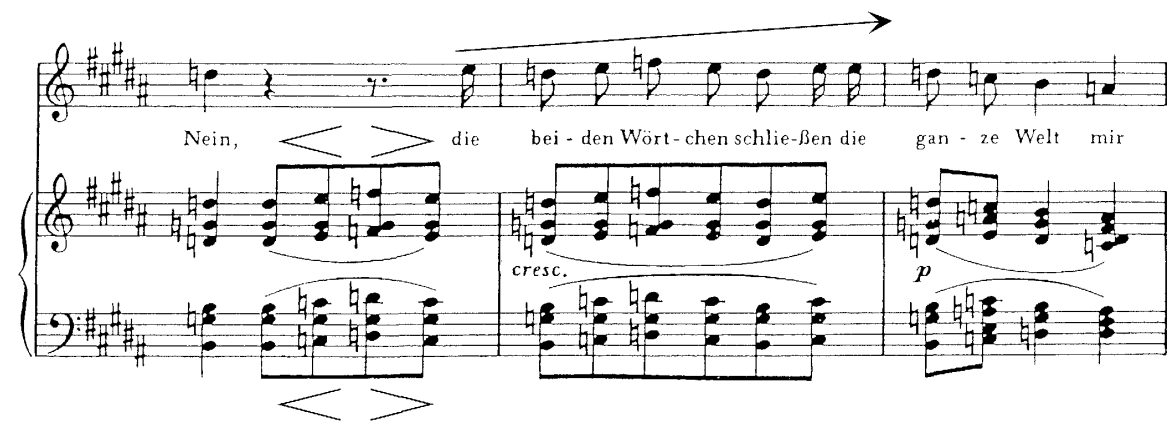


Wört - chen um und — um, ein Wört - chen um und — um.

[譜例 5]



Ja, heißt das ei - ne Wört - chen, das an - dre hei - ßt



Nein, die bei - den Wört - chen schlie - ßen die gan - ze Welt mir



ein, die bei - den Wört - chen schlie - ßen die gan - ze Welt mir ein.

シューベルトの歌曲集「美しき水車小屋の娘」(2)

[譜例 6]

○

[譜例 7]

sag Bäch-lein, liebt sie mich?

The Schubert Song Cycles "Die Schöne Müllerin" Vol. 2 **— Performance and Interpretation for the Singer and Pianist —**

Nonogati, Fumishige*

声楽の分野では演奏が全てである。その演奏の助けとして歌手とピアニストの為の演奏法の解釈、分析が必要であり、重要となってくる。現在、声楽の分野ではそのような文献がまだ不十分である。特にその中でもドイツ歌曲の分野では世界で最も優れている詩人の作品に作曲家が曲をつけていることでもよく知られている。今回はシューベルトの三大歌曲のひとつ、歌曲集「美しき水車小屋の娘」全曲をとりあげた。自分自身ドイツ歌曲専門の歌手であるため、ドイツの最高芸術作品であるドイツ歌曲の演奏法と解釈に注目している。

キーワード：シューベルト, ヴィルヘルム・ミュラー, 美しき水車小屋の娘, 歌曲集